

# INTERVIEW WITH LOCALS

## in OSAKA

物語を編むこと、それを表現すること。

@ yoruto books in 生駒ビルヂング

作家 柴崎友香 × 女優 谷村美月

「なにわ」という呼称のもと、古来より発展。現在も東京に次ぐ第二の都市として関西文化圏の中心的役割を担う大阪。そこに集うは、2014年、「春の庭」で第151回芥川龍之介賞を受賞した作家の柴崎友香と、女優として映画、テレビに舞台など、ジャンルレスに活躍する谷村美月。立場は違えど、共に大阪出身である二人が語る、物語を生み出すこと、そして演じることにかける思いとは。

[左ページ・谷村] ワンピース ¥8,900、ウェッジサンダル ¥7,900 [柴崎] トップス ¥3,200、デニムパンツ ¥9,900、ベルト ¥4,900、ストラップサンダル ¥5,900 (以上、すべて Gap)  
Photographs by Katsumi Omori Styling by Kaori Kawakami Hair & Make by Sayuri Yuki Text by Eiji Kobayashi

——大阪出身で現在は東京にお住まいのお二人ですが、大阪にいたころ、春になるとよく行っていた場所などはありますか？

柴崎：わたしは、東京に住むようになって10年になるんですけど、春になると桜の通り抜け（※1）に行けないのが寂しいんです。

谷村：通り抜けって何ですか？

柴崎：桜ノ宮の造幣局の敷地内に桜がたくさんあって、普段は入れないんですけど、桜が咲いてる時期に毎年10日間くらいだけ一般に公開してるんですよ。八重桜が百種類以上あるんです。大阪にいた時はいつも行ってたんですけど、開花状況によって時期が少しずつズレるので、うまく合うときに帰れなくて何年も行ってないです。

谷村：それは知らなかったです。

柴崎：お花見はどこに行ってました？ 地元は堺ですよね。

谷村：はい。でも春は花粉症なので、あんまり外に出れなくて……。

柴崎：それは辛いですね。お仕事も大変じゃないですか？

谷村：そうなんです。わたしは今「春」と言われると、春放送のドラマの撮影ですかね。今から撮影しています。

柴崎：そうか、ドラマ撮ってるとき季節感ズレますよね。春も先取り。

谷村：そんなのはっかりなんです（笑）。

柴崎：わたしは春になるといつも焦るんです。日本は年始よりも、年度が変わる春の方が新しいスタートって感じがあるじゃないですか。それでニュースで桜前線とか開花予想とか聞こえだすと、「えっ、もうそんな

時期!?」って。「わたしこの1年何してたんやろう？ 何かしないと！」って焦りますね（笑）。

谷村：作家さんも季節によってお仕事のサイクルとかあるんですか？

柴崎：あまりないんですけど、春って風景が忙しいというか、年末年始はクリスマスからお正月って飾り付けは急に変わるけど、風景としては冬のままじゃないですか。でも春はいっどんに萌え出づる感じになって、次々に花が咲いたりして風景が変わるので、楽しいと同時にすごく焦りを感じるんです。

谷村：ウキウキとかじゃなくて（笑）。

柴崎：そのウキウキが落ち着かなくて。わたし、普段はあんまり感情の上下がない方がいいんです。安定してたいというか、バーッと盛り上がりとか結構苦手で。

谷村：わたしも感情に起伏がないってよく言われますけど、実は違うんです。基本的には表に見えないんだろうなと思いますけど、裏では「ワ～！」ってなってて（笑）。

柴崎：あ、わたしもそうです。落ち着いてると言われるんですけど、内心は、いわゆる大阪で言うところの「イラチ」だったり。とにかく待つの嫌いで、行列の店とか絶対に行かないし、とくに東京は人が多いから、一人で勝手にイライラして反省します（笑）。

谷村：JRの券売機の硬貨を入れる穴が大きくなつたのって、関西人のためだと聞いたことがあります。お金をいっどんに入れることができますから。

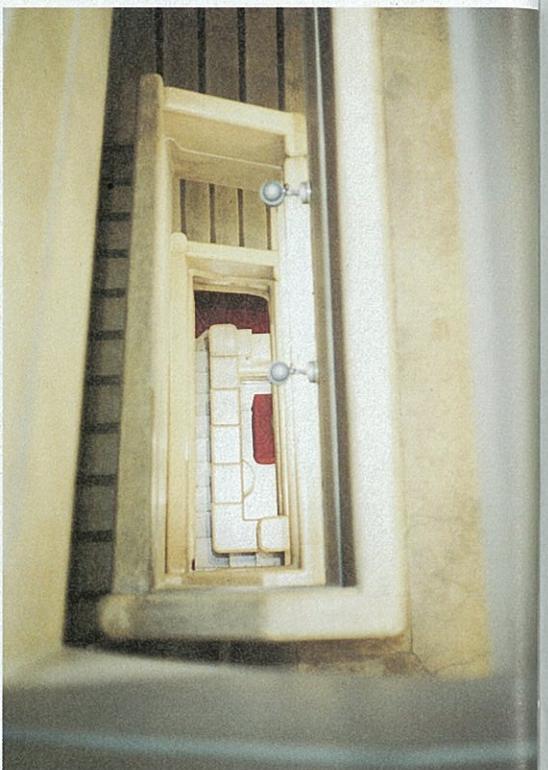
柴崎『春は次々に花が咲いたり風景が変わるので、楽しいと同時に焦りを感じる』





対談が行われたのは、もともと関西を代表する時計店だった生駒ビルディングの地下室。建設当初は住み込み従業員のための食堂だった。その後、物置となっていたところ、現在は私設の図書室「yoruto books」として利用されている。

柴崎『原作を担当した映画を観ると、作った人がどう“読んだ”か分かるのがおもしろい』



柴崎：分かる！スムーズに進まないと、イラッとしてしまう（笑）。去年、天王寺にできた「あべのハルカス」（※2）の展望台に行ったんです。そしたら並んでるおばちゃんがかなり早くから1,000円札握ってて、ああ、さすがに大阪、準備がいい。でも、これはこれでプレッシャーやな。

谷村：さっき東京でイラッとするっておっしゃいましたけど、わたしも今、東京が苦手かもしれないです。電車に乗るだけでもイラッとするんです。

柴崎：（笑）。例えどんな感じのことですか？

谷村：なんですかねえ……、雰囲気がイヤ！？

柴崎：反応が面白いですねえ。谷村さん、東京に移って何年ですか？

谷村：もう5年ですね。たぶん、上京してからドタバタしていた時期が終わって、東京に慣れようとしている時期なんだろうなと思いますけど。

柴崎：ああ、そのイラッとするというのが、慣れていく過程なのかもしれないですね。こう、なんか異物への免疫反応みたいな感じで。

谷村：異物（笑）。でも、異物は多いですね。基本的に関西の方方が、街を歩いていても、ちょっとこう、ついたら仲間に入れてくれそうというか。でも東京の人は、たぶんいろんな地方から来ている人もいらっしゃるからかもしれないんですけど。

柴崎：入れてくれなさそう？

谷村：うん。話したら話したで、たぶん普通に返してくれるんだろうけど、その微妙な感じが、わたしの中で常に違和感なんでしょうね。

柴崎：東京は全国から人が集まってるから、皆それぞれ自分のテリトリーを守ってやっていかないと、っていう意識があるかもしれないです。東京にいるわたしのイラチ加減も、人から見たらその守りの体勢なのかも。

谷村：こっちの人は、嫌な顔されたときとか分かりやすいですよね。東京のリズムで電車に乗ると、ガッて見られる（笑）。

柴崎：東京だと電車の中であまりしゃべってないけど、大阪で乗り換えた途端にみんなしゃべってる！って思います。表情にあまり裏表ないですよね。ストレートに出し過ぎって思うときもあるけど。

谷村：あ、でもひとつ言えるのは、わたしバリバリの関西人は苦手かもしれないです（笑）。仕事でもコテコテな役者さんとか来ると、自然と逃げちゃうんですよね。

柴崎：ハハハ（笑）。ちょっと濃すぎるのもそれはそれで。大阪というと「コテコテ」のイメージを持たれがちなんんですけど、そうでない人もたくさんいますよね。無口な人も、シュッとした人もいるし。今日撮影をしたこの建物みたいに歴史があって素敵なところもたくさん残っています。小説では、そんなリアルなところを書いていきたいんです。

#### 小説と映画の相互関係

柴崎：わたしはテレビも映画も好きでよく見てるんですけど、谷村さんは予想外の役をされるんで、いつも驚かされます。

谷村：そうですね、基本的にはいろんな役をやってますね。

柴崎：声優もされたりして、幅広いですよね。意外な面が見える役者さんの方が惹かれるところがあって、その分、普段どんな人なのか想像つかないなと思ってたんですね。会った人に、「思ってたイメージと違う」とか言われたりしますか？

谷村：学生の頃は結構言われましたね。「不思議」とか（笑）。

柴崎：ああ、かなり怖い役とかもされたりしてましたからね。

谷村：10代はほんと狂った役が多かったです。でも自分としてはすごく楽しんでやってました。

柴崎：へー。やっぱり普段の自分と違うからですか？

谷村：たぶん、自分の中でその振り幅が広い方が楽しいと思ってる時期だったんでしょうね。

柴崎：わたし自身は演技をやることはないですけど、もし俳優だったらぜんぜん違う人物をやってみたいでしょうね。この自分としてはできることできるわけですから。

谷村：でも今はそんなにしたくもないかな。きっと、やりすぎたんでしょうね。行定勲監督には映画『ユビサキから世界を』（※3）で土に埋められたりしてたんで（笑）。

柴崎：10代でいろいろ経験しそうた。

谷村：柴崎さんの『きょうのできごと』は行定さんが映画化されましたよね。自分が書いた小説が映画になるってどんな気持ちですか？

柴崎：小説って元は自分の頭の中ででき上がってくることなので、撮影現場に見学に行った時に、わたしが考えたことをなぜ初めて会う人たちが話し合っているんだろう？と、まずは奇妙な体験でした。

谷村：ここは違うのにとか思わなかったですか？

柴崎：もちろん違いはあるんですけど、小説って読んだ人それぞれの中にあるものなので、映画は、それを作る人がここを読んでこういう風に考えた、受け取ったんだなというのを見せてもらえる貴重な機会。ちょっとずつ違ってるところに、かえって発見があります。

谷村：わたしは自分が演じる場合、事前に原作の方を読んでいたりすると「ここは本当はこうなのに！」って欲が出てくるんですよね。

柴崎：そういう時はどっちに寄せるんですか？

谷村：わたしが参加するのは脚本の段階じゃなくて、キャスティングで決まってから。ある程度ストーリーが決まった時点で物事が進むので。現場で言えそうだったら言うときもありますけど、黙ってやった方がいいと思うときは言わないですね。でも自分が解釈した方に現場で変わっていくこともありますし、そういうのが面白い反面、難しいなって思います。

柴崎：映画やドラマの現場はたくさん人がいるから、その難しさもあるでしょうけど、人と一緒に作るからこそ生まれるものがありますよね。小説は何もないところからずっと一人で作っていくので孤独なんです。だから映画の現場は、つい、楽しそうなあって。

谷村：でもわたしは自分のことをいわゆる「映画人」ではないと思ってるので、根本的に映画のものづくりの過程が好きかと言われると、そうでもないかな。そこが難しいなあといつも思うんです。

柴崎：大勢が関わってこそ生まれてくるものがあると思う一方で、小説の場合は例えば「台風が来た」と書くだけで台風が来るからいいなと（笑）。撮影するとなるとそれはもう大変。

谷村：『きょうのできごと』（※4）で浜辺に打ち上げられたクジラが出てくるのは衝撃でした。

柴崎：あれは原作にはない場面なんです。こうつながるのか！ってわたしも驚きましたね。

谷村『原作と脚本の違いをどう解釈するか。それが演技の面白さであり、難しさ』

谷村：行定さんが足したシーンなんですか？

柴崎：そうなんです。まったく原作にはない場面なんだけど、今では『きょうのできごと』の小説にもあの場面があったように、自分でも思えてきたりします。

谷村：映画の出演者さんを聞いて、いかがでしたか？ イメージ通りでしたか？

柴崎：最初に『きょうのできごと』の出演者のお名前だけをうかがったときは、田中麗奈さん（真紀役）と伊藤歩さん（けいと役）を逆に思い浮かべてたんですよ。だけど、実際に映画になら、キャラクターと役者さんの個性が結びついで、監督の想像力に感服しました。今はあのキャスティング以外考えられないんですけど、それまで自分が持っていたイメージとはまた違っていたのが新鮮でした。

谷村：田中麗奈さんが酔っ払って男の子の髪を切るシーンがあるじゃないですか。わたしもそこは、もし逆の配役だったらって思つたりしていました。

柴崎：撮影現場で見ていたときは、カメラが回ると「けいと」や「真紀」の存在感が確かにあって、映画って複数の要素が掛け合わさって生まられていくものなんだよ実感しました。逆バージョンを見てみたい気持ちもちょっとあります。

谷村：そうだったんですね。聞いてみたかったのでスッキリしました（笑）。

柴崎：去年で映画化から10年経って、行定さんからの提案もあり『きょうのできごと、十年後』（※5）という続編を書いたんです。映画版のキャラクターに影響されて小説の登場人物が変化したところもあって、ほかの小説にはない体験でしたし、書くのも楽しかったです。

#### いかに複数のキャラクターを描き分け、演じ分けるか

—— 小説家の柴崎さんと、役者の谷村さん。お二人の共通点が、物語に出てくるキャラクターを頭の中で、あるいは演じることで「生み出す」ところなのではないかと思います。

柴崎：役者さんの場合は、例えば映画だったら、映画全体でこういうことが求められているとか、監督がこのキャラクターをこう演じてほしいというイメージを実現していくんですか？

谷村：理不尽ですよね（笑）。だって結局好みの問題だったりする部分もあるじゃないですか。

柴崎：普段、映画を観いてても、役者さんはどんな立ち位置でやってはるのかなと思って。「なんでこっちじゃなくてこっちがOKなんやろう」とか思つたりしますか？

谷村：でも監督がOKならOKなんだろうなって、そういうところはお任せしないですよね。

柴崎：どうやって納得してるんですか？

谷村：いや、分からないです。わたしも結果こうでいたいと思うんですけど、演じる前に最初の入り口がメイクや衣装だったりするので、もう姿からどんどん変わっていくんですよ。だから自分はこういうイメージじゃなかったけど、「このエクステ付けてみようか」ってなると、もうそれが基本になりますよね。

柴崎：なるほど。外見からだんだん変化していく過程っておもしろそう。最終的には監督が決めるとしても、演技の上では自分の判断基準はどういうところにおいているんですか？

谷村：やっぱり子役からやってきたので、わたしは基本的に母が見ているというのがベースにあるかな。ドラマにしても映画にしても、母は絶対に見てるので、それが基準で動いている感じがします。

柴崎：現場にいつもお母さんがいらしてたからですか？

谷村：いや、わたしは母親が現場に来ることはほとんどなかったです。子役によてもぜんぜん違うんですけど。

柴崎：そこにいなくても、常に意識してる？

谷村：来てるときと来れないときの芝居の差があったみたいで（笑）。だから本当に映画女優と呼ばれる方とはまたちょっと違うんだろうなとは思いますけど。

柴崎：とっても興味深いです。役者さんが「役作りのために」って話されることも感心するんですけど、谷村さんのお話は意外でした。まったく別の人間を演じるって不思議な状態で、想像がつかないところがあるんです。だから、小説家としてはもっと掘り下げてみたい。

谷村：確かに不思議ですよね。

柴崎：やりたくないとか思うこともありますか？

谷村：めんどくさいなと思うことはありますかね（笑）。

柴崎：めんどくさい！（笑）。

谷村：でもわたしとしては常に新しい気持ちでいるんです。やっぱり作品が残って、見てくださっている方がいるっていうことは、自分の中で大きいですね。

柴崎：撮影中は、演じるときに切り替える方ですか？ それとも普段の生活でも役に引っ張られますか？

谷村：どうなんだろう。切り替えてるつもりですけどね。小説書かれてる時はどうですか？

柴崎：自分の中にその小説の世界があって、そこで生活してるみたいなところはありますね。書いている間、扉を開けてその部屋に遊びに行ってる感じです。

谷村：ええっ、全然違います！ 扉を開いて見に行ってるっていう感覚はわたしにはないです。

柴崎：そんなにきっちり分かれてるわけじゃないんですけど、長く書いていた小説が終わるときは、この人たちともう会えないと思うと寂しくなりますね。

—— 役者さんは、同時に複数の仕事で別の役を演じるときもあると思うんですけど、その切り替えはどうされてるんでしょう？

谷村：もう現場に行くとまわりがみんな違うから、そこにいる人たちに合わせて自分も違う風になるんです。

柴崎：そうか、そこも自分じゃない視点がありきなんですね。

谷村：基本的にわたしはこだわりがないんですよ。これが欲しいとか、恋愛をしても自分がこうでいたいっていうのがないんですね。だから唯一この仕事ができるんだなあと思います。

柴崎：いろんな役ができるのも、そのあたりに秘密があるのかもしれませんね。ぜんぜん違う仕事の話を聞いてるとますます想像が広がります。今度、小説家として密着取材してもいいですか？（笑）。

谷村『ドラマにしても映画にしても、わたしは“母が見ている”という意識が常にあります』

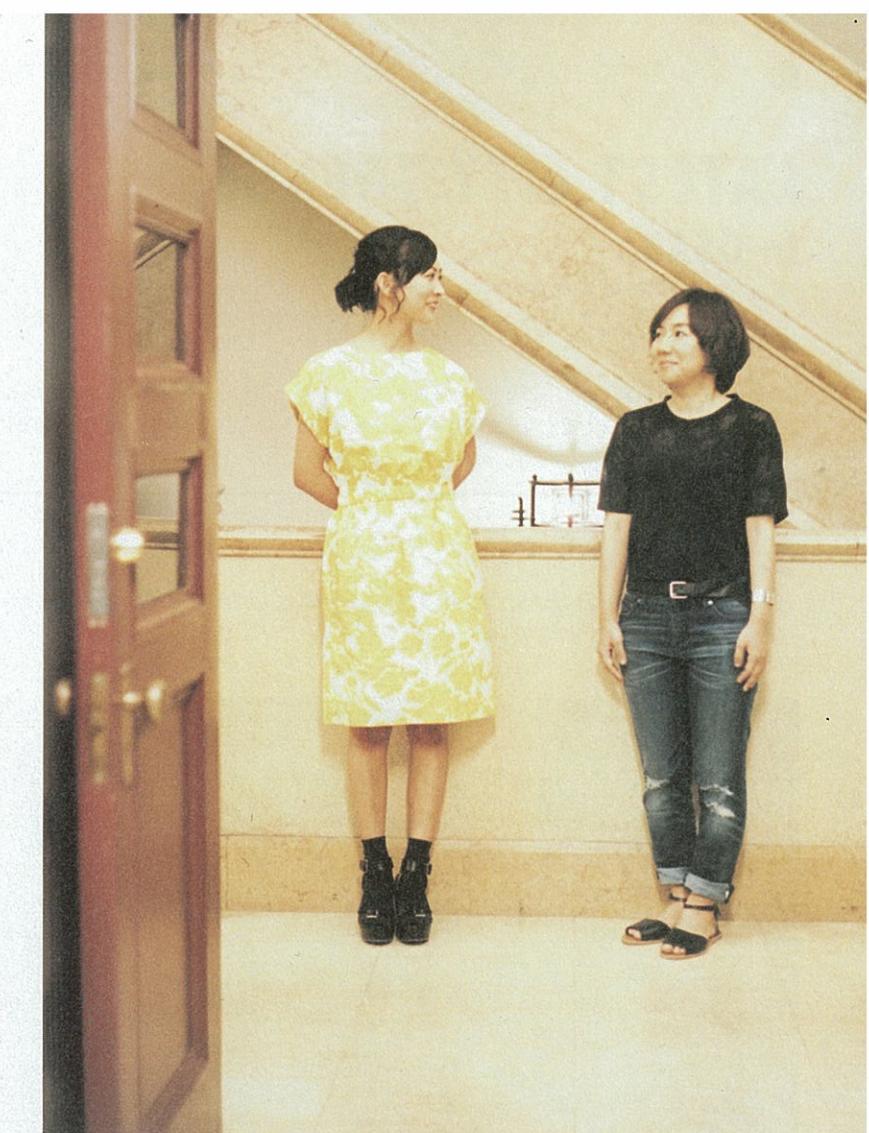
1【桜通り抜け】 大阪市北区天満にある独立行政法人造幣局（俗称：大阪造幣局）内にあるお花見スポット。普段は立ち入ることができないが、毎年4月中旬から下旬の桜開花時期に一般公開される。日本さくら名所100選にも選定されている。

2【あべのハルカス】 2014年3月7日に全面開業した、大阪市阿倍野区に立地するビル。地上60階建てで高さは300mあり、日本で最も高い超高層ビルであり、建物内には百貨店やレストラン、ホテルやオフィスのほか、展望台や美術館が入っている。

3【「ユビサキから世界を！」】 日本のロックバンドのアンダーラグフの同名曲に、映画監督の行定勲がインスピレーションを受け制作した映画。2006年7月に公開された。谷村美月は同作品に、主役の1人として出演。自殺願望のある少女を演じた。

4【「きょうのできごと」】 柴崎友香の単行本デビュー作。2000年に河出書房新社より出版された（2004年、文庫化）。友人の引っ越し祝いに集まつた数人の男女の錯綜する思いが、5つの視点から描かれる。2004年、行定勲監督によって「きょうのできごと a day on the planet.」のタイトルで映画化された。

5【「きょうのできごと、十年後」】 2004年に映画化されたことを受けて書かれた、「きょうのできごと」の十年後を描いた作品。2014年に河出書房新社より出版された。同年、「春の庭」で第151回芥川龍之介賞を受賞しており、本作が芥川賞受賞後の第一作目となる。



#### 柴崎友香・TOMOKA SHIABASAKI

1973年大阪府生まれ。2000年『きょうのできごと』で作家デビュー。2007年『その街の今は』で第57回芸術選奨文部科学大臣新人賞、第23回織田作之助賞大賞、2010年『寝ても覚めても』で第32回野間文芸新人賞、2014年『春の庭』で第151回芥川賞をそれぞれ受賞。著書に『わたしがいなかった街で』など。最新作は『パノラマ』。

#### 谷村美月・MITSUKI TANIMURA

1990年大阪府生まれ。2002年、NHK連続テレビ小説『まんてん』でデビュー。2005年映画『カナリア』で主演し、第20回高崎映画祭最優秀新人女優賞受賞。以来、映画・ドラマ・舞台・CMと幅広く活躍。近年の出演作に映画『白ゆき姫殺人事件』、『円卓』、『幻肢』、『深夜食堂』など。今年も映画『白河夜船』、『罪の余白』などの公開が控えている。



#### 01 o c-4 yoruto books (生駒ビルヂング)

1930年に建設されて以来、80年以上の時を刻んできた登録有形文化財、生駒ビルヂング。その地下室で、静かな夜にのみ、ひっそりとオープンする私設の図書室。利用したい場合は、HPより問い合わせの上、予約が必須となる。

住所 大阪市中央区平野町2丁目2-12 生駒ビルヂングB1F  
電話 非公開  
営業 夜。詳しくはHP ([yorutobooks.com](http://yorutobooks.com)) から問い合わせのこと

柴崎『小説を書くのは、自分の中にある小説の世界で生活してみたいな感覚』